成人すると塩になる世界で生き残る話
【小説】宙乃塵屑
【挿絵】新堂アラタ
試し読み版

A Story to Survive in a World Where it Will Become Sait as an Aduit

story by Debris & illustration by Arata Shindow

怪物と闘う者は、闘いながら自分が怪物になってしまわないようにするがよい。
長いあいだ深淵を覗きこんでいると、深淵もまた君を覗きこむのだ。

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ『善悪の彼岸』
（中山元・訳　光文社・刊）

第一話　現実逃避／「彼は孤独でした」

ふとリビングに小気味良い音が響いた。

「来たか……っ！」

抑えきれぬ興奮を孕んだ声で、一人の少年が呟いた。

彼は寝そべっていたソファから転げ落ちるようにして立ち上がり、壁際のインターホン端末に駆け寄って通話ボタンを押した。

《あ、どうもー、賀川急便でーす。ジャングルさんから篠宮祐也さん宛てのお荷物をお届けに参りましたー》

「開けるんで上までお願いします」

《はーい》

彼――祐也は通話を終えると、マンション一階エントランスのドアロックを解除するボタンを押した。そして口元に仄かな笑みを浮かべつつ、リビングから玄関へと向かう。

本来ならば玄関前でドアホンが鳴るのを待つところだが、今まさにエレベーターで上がってきているだろう荷物は特別だ。祐也はスリッパを履くと玄関扉を開け、マンション八階の共用廊下に出た。

（なんだこれ……暑すぎだろ……）

冷房全開で快適だった屋内から一転、実に七月下旬らしい高温多湿な外気に触れ、思わず顔をしかめた。八階でこれならば、地上の不快指数は如何ほどなのか……。

辟易としながらも、廊下の手摺壁前で大きく伸びをした。これからしばらく引き籠もる予定なので、最後に外の空気を吸って青空くらいは眺めておきたかった。

「ちょっと」

不意に声を掛けられ、配達員かと思って左に目を向けると、少女がいた。栗色の毛先が肩の辺りで微風に揺れ、猫目を思わせる勝気な双眸がやや下から見上げてくる。

隣家である八〇四号室の住人にして、同じ高校に通う同級生の新崎若菜だ。見た目通りに活発な性格の少女で、確か五月にあった陸上の大会で優勝し、全校集会のときに表彰されていた。

（あー、クソ、タイミング悪……）

新崎とはこうして廊下で会っても挨拶すら交わさず無視し合う間柄だ。にもかかわらず、運悪く今年は彼女と同じクラスになってしまった。

祐也はこのマンションに三年前に引っ越してきたので、新崎とは特に幼馴染みというわけでもない。引っ越してきた当初は何かと話しかけてきたり、義理の姉妹共々、友好的な関係ではあったが……。

とにかく祐也は予期せぬ非日常を前にして、思わず訝し

げな眼差しで少女を見てしまった。
「邪魔なんだけど」
新崎から返ってきたのは嫌悪感丸出しの視線と声だった。
しかし祐也はそんな反応に頓着せず、邪魔と言われた意味に気が付いた。玄関扉は開きっぱなしで、更に手摺壁の前に立っているので、通路が塞がれている。通り抜けようと思えば十分可能だが、邪魔なのは確かだろう。
「悪い」
と無愛想に言って祐也がドアを閉めると、今度は見慣れぬ少女が視界に飛び込んできた。
艶やかな長い黒髪を腰元まで伸ばした大人しそうな少女で、年頃は新崎と同程度だろう。新崎の隣に立っているので、ドアの影になっていて見えなかった。
「ふんっ……ごめんね唯、もういいよ」
「うん」
新崎は不機嫌そうに鼻を鳴らしてから、隣の少女に微笑みかけている。
真逆の印象を受ける二人は手を繋いでいて、黒髪の少女は祐也を一瞥すらしないどころか目を閉じており、そのまま歩き出して篠宮家の前を通り過ぎていく。見慣れぬ少女の片手には白い杖が握られていた。
「若菜ちゃん、いま話しかけていた人はお隣さん？」
「そうよ、でも気を付けてね唯。あいつ学校でもボッチで何考えてるか分っかんないしキモいから」
「そ、そうなの……？」
「そうそう、だから廊下ですれ違っても無視よ無視！　あ、でもあいつのお姉さんと妹ちゃんは可愛いしいい人よ」
二人はそんな会話をしつつ、新崎家の玄関扉を開けて姿を消した。
（陰口なら聞こえないように叩けっての……）
とは思うが、真っ直ぐな性格の新崎は陰湿な行為を嫌う。だから陰口にならないように、敢えて本人の前で堂々と悪し様な物言いをしているのだろう。
（……難儀な奴）
軽く溜息を吐いて、入道雲の浮かぶ夏空を見上げた。
別段、キモいと言われるほどキモくないと、祐也本人は思っている。身長は一七四センチで体格もそこそこ良く、太っても痩せてもおらず、顔も人並み程度には整っている。外見的にはキモいと中傷される謂われのない、一見すればどこにでもいそうな高校二年生だが……。
性格が歪んでいることは自覚している。
「こんちはー、あの、篠宮祐也さんですか？」
「あぁ、はい、そうです」
ようやくやって来た中年の宅配員に適当に対応し、伝票

にサインした。一抱えほどもあるダンボール箱を受け取ると、宅配員は職務上の礼を口にして低頭し、去って行く。

「……さて、と」

祐也はもう先ほど会った新崎のことなど忘れて、自嘲的な笑みを零しながら部屋へと戻っていった。

■　■　■

「……最高だな」

自室の椅子に座り、コントローラーを握りながら驚嘆する。祐也は前代未聞の美麗かつ大迫力な映像に感動を禁じ得なかった。

（さすが最高クラスのグラボだ、待った甲斐があった）

届いたパソコンのパーツを自作マシンに組み込んだのが三時間前のことだ。飲食物を机や床に配置し、予めダウンロードしておいたゲームを起動すると、序盤から引き込まれた。43インチの4Kディスプレイには惚れ惚れするほど高解像度なグラフィックが展開され、現実と見紛うほどの世界が圧倒的な没入感を強いてくる。

「今年の夏休みはこいつで終わるな……」

ワイヤレスヘッドホンから流れるBGMや効果音に酔い痴れ、コントローラーを操作しながら、祐也は一人呟いて口角をつり上げた。

半年前からゲーム業界にて最大級に期待されていた大作『キープアウト5』。昨今流行のオープンワールドRPGであり、本日七月三〇日に全世界同時に発売した。

『キープアウト5』のあらすじはこうだ。

二〇年前に北アメリカ大陸がバイオテロによって壊滅したという設定のニューヨーク周辺が舞台で、主人公はイギリスから派遣された調査員という立場だ。感染拡大を防ぐために立入禁止とされる大陸に棲息する、変容したかつての人類や動植物共と戦いながら、二〇年前にいったい何が起きたのかを調べていくが、真実を追う勢力は多数存在し、ときに彼らと協力し敵対しつつも調査任務を果たしていく……というのがメインストーリーとなっている。

（毎日一八時間できたとして……夏休み中に五四〇時間はできるな）

先ほど入手した自動小銃で敵対勢力の調査員を射殺しながら、祐也は完璧な夏休み計画を再認識する。

パソコンのパーツを購入するために、クソ野郎の汚い金を使って良いものかどうか懊悩しはしたが、いざ使ってみればどうということもなく、金は金だと実感できた。

こんなことなら『キープアウト5』の発売日直前まで迷うことなく、早々に購入してさえいれば、日付が変わった

瞬間からプレイできていたものを……。
「まあいい、クソったれな現実を後悔するなんざ無意味だ」
傍らに置いていたペットボトルに口を付けて喉を潤し、気分を入れ替えた。
ミネラルウォーターや炭酸飲料などは通販で大量に購入してある。冷凍食品やインスタント食品、シリアル食品からサプリメントの類いまで十二分に買い込んであるので、一ヶ月丸々引き籠もることすら可能である。
現実（リアル）の煩雑なことなど忘れて、虚構（ゲーム）の世界にのめり込むことが、篠宮祐也にとっての幸福だった。

■　■　■

全身が振動するほどの音が腹の底から響いた。そこでようやく空腹を自覚し、コントローラーから手を離す。
（あー、腹減った。そういえば今日何日だっけか……？）
部屋に窓はないので、今が昼なのか夜なのかすら不明だ。腹が減ったら食べ、眠くなったら寝て、しかし歯磨きは食後に必ず行い、最後にシャワーを浴びたついでに日付を確認したときは八月五日だった。
椅子から立ち上がって大きく伸びをすると、ベッド脇に置いてあるデジタル式の目覚まし時計に目を向けた。
（八月九日、一〇時か……そろそろシャワー浴びるか）
四日も経っていたのかと思うと、全身が痒くなってきた。
祐也は渇いた瞳に目薬を差してから部屋を出て、まずは冷凍食品を電子レンジに放り込み、加熱し始めておく。それからシャワーを浴び、パンツ一丁で電子レンジから解凍されたチャーハンを取り出して、自室に戻る。
（さてと、さっさと食べ――ん？）
聞き慣れた音が聞こえて、思わず顔をしかめた。スプーンを持ったまま逡巡（しゅんじゅん）した後、のっそりと腰を上げてリビングに戻り、壁際のインターホン端末に向かう。
そして通話ボタンを押した。
《あっ、先輩ですか先輩ですよね!?　良かった、やっぱりまだ家にい――》
「帰れ」
ディスプレイに映っていたポニーテールの少女をボタン一つで消し、祐也は部屋に戻った。
（あいつなんで制服着てたんだ？　補習か？）
更にいえば、なぜか一階エントランスからではなく、既に八階の玄関前まで来ていたが、これは以前にも一度あったことなので気にしない……と思った矢先、再び来訪者を告げる電子音が家中に鳴り響く。
（クソ、あのストーカー女め……あんな奴に俺の優雅な夏

休みをぶち壊されてたまるか）

ヘッドホンをして三度目の音をやり過ごし、内心で愚痴りながらチャーハンを食べ進めていく。

あの後輩――森園真名実。

彼女は危険だと直感が告げている。それは三ヶ月前から一向に変わらず、会う度に警戒を強めてきた。これまで通り、あの少女とは極力関わらない方が身のためだろう。

（あんな奴より、今はさっさとゲームの続きだ……）

胸中で呟きつつチャーハンを口内に入れ、咀嚼しながらコントローラーを握る。

せっかくの夏休みなのだ。クソったれな現実など横目にだろうと見たくはない。それは母も義姉も同じだろうし、だからこそ義妹を連れて旅行しているのだ。

「……俺も行くって言ったら、どんな顔しただろうな」

祐也は微苦笑を浮かべて意味のない想像を打ち切り、ゲームに意識を集中させる。

夏休みの間くらいは現実から目を背けていたかった。

■　■　■

森園が訪ねてきた数日後。

「ん……？」

突然、電灯が消えた。祐也は部屋を暗くしてゲームしたりなどせず、自室のシーリングライトは常時点灯状態だった。それが何の前触れもなく消えたので、机の下に置いてある無停電電源装置を見てみると……。

（駆動してやがる……冷房も消えたし、停電か？）

兎にも角にも、祐也は『キープアウト5』の進行状況をセーブして終了させた。敵調査員をあと一人殺せば千人キルの実績が解除されるところだったのだが、致し方ない。最上位の新型グラフィックボードはその高性能に比例して消費電力も半端ないので、予備電力などすぐに食い尽くす。

久々にご対面するデスクトップ画面の右下を確認すると、現在時刻は一五時三七分のようだった。念のため、すぐにパソコン本体の電源も落としておく。

（ったく、こんな真夏に……いや、ブレーカーか？　冷房はこの部屋しか使ってないんだが……）

暗闇の中、ひとまず手探りでベッドの枕元にあるだろうスマートフォンに手を伸ばした。なんとか掴み取ってボタンを押すも、反応がない。充電切れのようだ。

祐也はワイヤレスヘッドホンを外すと、仕方なく明かりなしで部屋を出る。分電盤は下駄箱上の壁に埋め込まれているが、生憎と暗くて見えないので、ひとまず手探りで玄関扉を開けた。

「うわ……外は地獄だな」
むわっと入り込んできた高湿な空気が一瞬にして全身に纏わり付き、久々の自然光が網膜に突き刺さって、思わず眉根を寄せる。早々にブレーカーを上げてドアを閉めようと、分電盤に目を遣るが……。
（落ちてない……？）
判断に窮し、しばし黙考する。
確かブレーカーが落ちる場合、引いては停電する場合は大抵、過電流か漏電が一般的だと聞く。しかし分電盤に異常はないのだから、今回の停電は周辺一帯の電力使用量が超過したか、送電線や変電所の不具合など、外部に原因がある……のかもしれない。
「やめなさいっ、離しなさいよこのっ！」
思索に耽っていると、不意に廊下から声が聞こえてきた。何やら切羽詰まったような響きだったため、反射的に耳を澄ませてみる。
「は、離してっ、離してください！」
「くっそ、こいつ暴れんじゃねえよ！」
「あーあー、カズ、なに顔殴ってんの。せっかく可愛い子なのにさー」
「唯!?　唯しっかりしてっ!?」
外から届くのは日常で聞く機会はあまりないはずの怒号や悲鳴だ。
男の暴力的な声、女の悲痛な声。
生々しいまでにリアルな情感を秘めた響きはゲームのボイスとは一線を画している。
だからだろうか。同時に耳朶を打ったそれらが否応なく不快な記憶を想起させ、祐也は軽い頭痛に見舞われた。
「でも静かになっただろ」
「ほんっとカズは馬鹿だなぁ、前も言ったじゃん。人ってのは気絶すると重くなって運びにくくなるんだよ。しかもこっちの女、これで余計に暴れまくるよ絶対」
「あんたたち女の子を殴ったりして恥ずかしくないの!?」
「んだとテメェッ!?」
「和輝やめろ、優大の言う通りだ。殴るより脅せばいい、こうやってな」
痛みを振り払うように頭を振りながら、祐也は己に言い聞かせていく。
（あのクソ野郎を突き落としたことに間違いはない）
奴は母も、義理の姉妹も、自分のことも、皆を苦しめていた。死んで当然のクズだ。
「ほらな、静かになった」
「だったらオレにもそれくださいよ間島さんっ」
「間島さんと久瀬さんが、カズみたいな直情馬鹿に持たせ

るわけないじゃん。直人もそう思うよね？」
「は、はは……そう、かもね」
「杉田、あんた……なんで……あっ、石川っ、石川起きて！」
祐也は大きく深呼吸をした。
まずは停電の原因を突き止めて、早くゲームを再開しよう。もうリアルの声は無視だ。
「あれ、ねえ間島さん」
「無駄話は控えろ優大、早く行くぞ」
「いえいえ、あのドアってさっきは開いてなかったですよね？」
「む……そうだな。お前らはこいつらを押さえていろ。俺が様子を見てくる」
「今さっきの停電といい、なーんか嫌な予感するね……」
「なんだ優大、またテメェはいちいちびびりやがって。見ろよ間島さんの堂々とした背中をよ」
「石川っ、なんで……あんたら、まさか石川殺したのっ!?」
周辺一帯も停電している場合、電力会社の復旧作業次第だ。とりあえず他の家々を見回して判断してみるのがいいだろう。だが共用廊下の方は何やら面倒事が起きていそうなので、ベランダから確かめてみよう。
そう判断して、まずは玄関扉を閉めようとしたところ、
「……ん？」
「……む？」
共用廊下にいる見知らぬ大男と目が合った。
ドアレバーを掴んだまま少々呆けてしまったが、すぐに目を逸らして扉を閉める。
「――っ!?」
だが手が伸びてきてドアの端を掴み、爪先も差し込まれた。祐也は咄嗟に腕を強く引いて、無理矢理にでも閉扉しようと試みる。先ほど目が合った瞬間、相手の剣呑な気配を敏感に察知していたからだ。義父のおかげで――せいで、暴力の臭いは嗅ぎ分けられる。
「お前ここで何をしている!?　どこの奴だ!?」
「クソッ、おい離せ！　指千切れても知らんぞ!?　警察呼ぶぞっ！」
「警察……？　ははっ、警察か、その返事で十分だ！」
十数センチほどのドアの隙間から、手がもう一つ現れた。その手には黒光りする何かが握られている。
『キープアウト5』にも登場していた、回転式弾倉を有する、アレだ。
「え……？」
呆然としかけたのは数瞬だけだ。
祐也はすぐに理解すると同時に最大の警戒心を抱き、反

射的に後ずさりながらドアレバーから手を離した——瞬間、鼓膜をつんざくような炸裂音が響いた。ここ最近、ヘッドホンから幾度となく流れてきていた効果音に酷似しているが、決定的なまでにリアリティな、その音響。

あまりに非現実的な事態に直面し、祐也の脳はこれが現実（リアル）なのか虚構（ゲーム）なのか、判じかねた。

「間島さんっ、どうしたんスか⁉」

「大丈夫だ、心配す——ガァッ⁉」

鼻腔を突く硝煙の臭気が消えぬ間に、玄関扉が開いて大男が姿を見せた。

これが火事場の馬鹿力というやつだろうか。

無意識的にその好機を待っていた祐也は逞（たくま）しい首が現れた瞬間、渾身の力で踏み込んで、いつの間にか握っていた細身の婦人用傘を突き出していた。いや、突き上げたという表現の方が近い。

「ぅゴ……ぐ……ぁ……？」

一〇代後半から二〇歳前後ほどに見える。自身より一〇センチは上背のある如何にも筋肉質な体格の青年だ。黒い帽子を被っている彼は鍔（つば）の下で愕然（がくぜん）と目を見開き、口から赤い液体を零している。

回転式拳銃を持った右手がゆらりと動いたのを視界の端に捉え、祐也は左手で〝敵〟の右手を掴んで押さえながら、右腕に力を込めた。ぐぬっと傘がさらに埋まり、大男の身体がふらりと斜め後ろに倒れる。

「間島さんっ⁉」

祐也は〝敵〟の右手を掴んだままだったので、倒れた男に引き摺られるようにして共用廊下に出ていた。片膝を突いたまま首を右に向けると、数メートル先に肥満体の少年がいた。そう認識しながらも自身の左手は勝手に動き、大男が手にしていた代物を確保しようとしている。

「テ、テメェ……よくも間島さんをっ！」

驚愕した態（てい）で立ち尽くしていた肥満体の少年が、形相を赫怒（かくど）に歪めて駆け出してきた。

（変異体）

廃墟と化したニューヨークの街並みにもこんな怪物がいたな……と、祐也は暢気（のんき）なほど冷静に考えていた。変異した元人間のそいつはゾンビのように襲い掛かってきて、幾度となく撃ち殺してきた。

「————」

あと二メートル。

掴みかかろうと両手を伸ばして突進してくる誰かを、祐也は撃ち殺した。

身体が勝手に動いていた。左手で奪い取った凶器を右手に持ち替えて片手で構え、トリガーを引き絞ると、〝敵〟

の右目に命中した。ビギナーズラックというやつだろう。
銃を撃つのは初めてだが、初めてではない。ここ最近は何千回とボタンを押してきた。しかし、引き金を引いたのはこれが初めてだ。4Kディスプレイに映る最高解像度の『キープアウト5』よりも鮮烈な光景だ。
（すげえ……なんだこれ）
内心で感嘆する祐也には、慣性に従って倒れ込んできた〝敵〟を避ける余裕すらあった。
なぜかは分からない。以前に一度、ここであのクソ野郎を殺していたからかもしれない。
経験値が貯まっていたのだろう。
レベルアップはまだか、次は一四七レベルだったはずだ。
「……」
「……」
共用廊下の先、八〇四号室の前には五人の人影があった。
頭部から血を流して倒れている制服姿の少年、ぐったりと床に倒れ込んでいる長い黒髪の少女、肩に制服姿の少女を担いだ金髪の少年、手錠をされて肩に担がれながら呆然とこちらを見遣る隣家の少女、そして唖然とした面持ちで立ち尽くす制服姿の少年。
「う、あ……うわあぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
どこか見覚えがあるような顔をした制服少年が、叫びながら背中を向けて走り出した。
「あっ、おい直人！　く……あぁもうっ！」
「え……ちょっと、篠宮、助けて篠宮っ！　祐也ぁ！」
金髪の少年は制服の彼と祐也を交互に見遣った後、助けを乞う少女を担いだまま、制服姿の背中を追って行く。
祐也は久々に呼ばれた自身の名でふと我に返り、遠ざかっていく二人――いや三人を反射的に追い掛けそうになるが、両足は動いてくれなかった。
「……おい、これ……洒落になんねえぞ」
自身が刺し殺し、撃ち殺した者たちを見下ろして、思わず呟きが零れ出た。廊下の先、階段のある方から少女の声が響いてくるが、祐也は自身の右手が握っている物に意識を奪われ、それどころではなかった。
「なにが……何が、どうなってる……？」
遠く響いてきていた少女の声が突然途切れた。
見つめていた回転式拳銃から目を逸らし、もう一度、足下に転がる二人分の死体を見下ろす。
そこでようやく現実（リアル）と虚構（ゲーム）の区別が明確となり、己がしでかしてしまった事の重大さを認識した。
「……うそだろ、おい」
祐也は思考が纏まらず、ただ立ち尽くすしかなかった。

第二話　状況整理／「荒唐無稽でしたよね」

祐也は冷静になる方法を知っている。

自身を俯瞰するのだ。

主観で世界を捉えるのではない。客観で、自身をも含めた世界全てを頭上から見下ろすように、認識を広げていく。そうして感情を切り離すことで、他人事めいた、映画でも見ているような気分になれる。

クソ野郎を突き落としたときはこれで乗り切った。

「……よし、問題ない、俺は大丈夫だ」

大きく深呼吸を一つ。血臭はするが、慌てることはない。

「……なぜ、こんなに静かなんだ。二回の銃声は結構響いたはずだ」

敢えて考えを口に出すことで、次々と思考が溢れ出てくる脳内を整理していく。

「最初に撃ってきたのはこいつだ。壁にも弾痕があるはず。だからこれは正当防衛……ではきついか？　いや、とにかくまずは……どうする、逃げるか……いや警察から逃げ切れるとは思えんし、さっきの奴らは……」

目撃者は三人いる。

金髪の少年に見覚えは全くなかったが、残り二人は違う。

一人は隣家の少女こと新崎で、もう一人の少年は黒い長ズボンに白い半袖ワイシャツという馴染み深い格好をしていた。新崎が高校の夏用制服を着ていたので、少年の方もおそらく同じ高校の生徒だろう。

（あの二人は新崎を攫っていったように見えたが……停電して、こんな一般人っぽい男が銃持ってて、いきなり発砲してきて……何が起こってる……？）

祐也は右手に拳銃を持ったまま、左手を口元に当てて考えていく。そして何はともあれ、思った。

やはり静かすぎる。

「……車が走ってない」

八階の共用廊下から見える地上の風景は静止していた。

ここは住宅街の只中なので、マンション前の通りならば未だしも、遠くの交通量が多い道路を見遣っても一台たりとて走行している車両がない。それどころか人の姿すら見当たらず、動いているものといえば鳥くらいだ。

普段は聞こえるはずの街の生活音すらなく、不自然極まる静寂が漂っている。

（なんだ……何かが起こっているのは間違いない……あっ、そうだスマホ、ネットを見れば何か……っ！）

急いで薄暗い自室に駆け戻った。玄関から漏れ入ってくる光を頼りに、ベッド脇に投げ出されていたスマートフォ

ンを手に取る。が、幾らボタンを押しても反応がない。
「そうだった……クッソ、落ち着け……停電じゃ充電すらできん……いや待て、あそこに倒れてる二人っ」
裸足のまま玄関を飛び出し、新崎家の前に倒れている少年少女の側に駆け寄った。少年は俯せに倒れており、血溜まりに沈んでいる。やはり制服姿で、ぴくりとも動かない。
祐也は右腕の手首に触れてみた。
（脈は……ない。死んでやがるのか？　じゃあ、こっちの女も……？）
仰向けに倒れている少女に視線を転じた。この真夏に長袖の白いブラウスと膝丈のハイウエストスカート姿で、両手は黒い手錠で拘束され、長い黒髪が床に散乱している。出血は鼻血くらいで他に外傷は見られず、胸部の豊かな膨らみが微かに上下しているので、生きてはいるのだろう。
（こいつ……どっかで見たような……？　いや、とにかく、生きてるなら話を聞けるはずだ）
一一〇番するという思考など祐也の頭にはなかった。先ほどの金髪少年たちが通報するだろうし、そもそもこの静かすぎる街の警察がまともに機能しているのかどうかも定かではない。それに何より、どうせ逮捕されるにしても現状くらいは予め把握しておきたかった。
「おいっ、おい起きろっ、おい！」
「……」
「おいあんた！　おいっ！」
少女の華奢な肩を揺すってみるが、起き出す気配はない。
「クソ、やっぱ気絶してやがる……仕方ねえな」
祐也は家着であるハーフパンツのポケットに拳銃を突っ込み、少女を抱き上げた。無論、お姫様抱っこと呼ばれる抱え方などしない。意識を失った人間は存外に重たく感じるので、安定して抱えづらいのだ。そこで以前に見た映画を参考に、首の後ろと両肩を使って横向きに背負い上げて、少女の左足と拘束された左手を掴んで保持する。
（……思ったより軽いな）
ひとまず自宅に少女を運び、ベッドに寝かせ付ける。
薄闇で判然とはしないが、改めて見下ろすと相当に端正な顔立ちの美少女だ。長い黒髪に艶は少ないものの、精巧な人形の如く整然とした目鼻立ちは一種の犯し難い潔癖さを孕んでいる。長い睫毛は微動だにせず、ただ安定した呼吸で胸元が上下している。
背負った際に感じた柔らかさから、胸部は見た目通り相当な大きさなのが分かった。年頃は祐也と同程度だろうが、どことなく判然としない。この静謐さは年上の女を思わせるし、あどけない寝顔は年下を思わせる。
「鼻血は……まあいいか、まずは現状の把握だ」

祐也は自身に言い聞かせるように呟いた。
こんな状況とはいえ、自身が性欲旺盛な年頃の男であることは自覚している。これほど容姿端麗な少女が目の前で無防備な姿を晒していれば、否応なく劣情も湧き上がってくる。
我ながら余裕が出てきたなと他人事のように思いながら、再び動き出した。

■　■　■

とりあえず、自身が殺した二人の男を調べてみた。現場保存などという考えは祐也の頭になく、この得体の知れない状況と嫌な予感に従って、所持品を漁っていく。
まずは傘で突き殺した帽子の大男から。
（身元を確認できるものはない……鍵……車のか？　なんだこのごついナイフ……まさか軍用？　それに無線機……なんだこいつ……）
大男は中サイズのリュックを背負っているが、仰向けに倒れている。傘が突き刺さったまま両目を見開いて絶命している死体を改めて見下ろし、逡巡した後、傘を引き抜いて俯せに転がすと、リュックを奪い取る。
そして早速、中身を確かめてみた。
（手錠……本物か？　いや、あの女のは本物っぽかったし、銃からして本物だ。この箱は、まさか……弾薬……あとは煙草、ライター、懐中電灯にガムテープ、スポーツ飲料）
他にも色々と入っていたが、今は何が入っているかの確認だけに留める。
混乱を抑えながらも、早々にもう一人の男に目を向けた。初めて撃った銃で頭部に当ててしまった肥満体の少年だ。
（こいつも身元が分かるものはない……そして無線機か。他は……スマホに、スタンガン？　それに警棒か、これ？）
とりあえず白いスマートフォンのボタンを押してみた。暗証番号入力画面が表示され、使えそうにない。だが日時は確認できて、どうやら今日は八月一四日らしい。
（もう半月も引き籠もってたのか……とりあえず、バッグの中は……）
脂肪に覆われた肉体からショルダーバッグを剥ぎ取る。尚、少年の死に顔はなるべく見ないようにした。なにせ右の眼球が潰れているのだ、グロテスクにすぎる。
鼻腔を突く血臭と凄惨（せいさん）な死に様に顔をしかめながらも、中身を確認していく。
（飴、ガム……クッキー？　フルーツジュース……包丁、ビニール紐、ハサミ……コンドーム……？）
所持品から推測される素性や状況を思いながらも、祐也

は新崎家の前に倒れている制服の少年を見遣り、そちらへと駆け出す。

（血溜まりは頭から広がってる……頭部を殴打されたのか？）

死体の側には血濡れた鉄パイプが転がっている。そして使い古された感のあるバットも見られるが、こちらは血濡れていない。

（このバットがこいつの武器で、鉄パイプに殴殺されたのか。殺ったのは……あの逃げた奴のどっちかだな）

大男にはナイフがあるし、肥満少年には警棒があった。わざわざ鉄パイプで殴り、この場に落としていることを考えれば、妥当な推理だろう。が、犯人のことはどうでもいい。

祐也は俯せの死体を仰向けに転がした。

「ん……この校章、うちのだ……」

襟元まで血で真っ赤に染まった半袖ワイシャツの左胸ポケットには校章が小さく刺繍されている。それに胸ポケットには生徒手帳が入っていたので、取り出してみた。

「……二年一組、石川真ノ介……あっ、こいつ委員長か」

同じクラスの学級委員長だと遅まきながらに気が付き、少なからず衝撃を受けてしまう。

石川はクラスで孤立していた祐也に対しても平然と話しかけてきていた。誰に対しても分け隔てなく接する快活な性格の持ち主で、二年一組では名実共にクラスの代表のような人柄の良い少年だ。成績は芳しくないと評判だったが、その馬鹿さ加減も愛嬌の一つとして受け入れられて、多くの同級生に好かれているようだった。

「……」

祐也は無言でズボンのポケット漁ってみた。すると案の定というべきか、スマートフォンを発見する。

（こいつなら……やっぱりか、ロック掛けるような性格じゃねえよな……って、圏外じゃねえか）

先ほど白いスマートフォンを確認したときは、ロック画面と時間に意識を持っていかれて気付かなかった。

（クソ、冷静になれ……色々考えるのは後だ、まずはあの女だな）

同級生の生徒手帳とスマートフォンを自身のポケットに入れ、玄関に入る前にもリュックとショルダーバッグを回収しておく。これで殺人罪に加えて窃盗罪も犯したことになるが、現状の不可解さは常軌を逸している。気にしている場合ではないという理性の訴えを受け入れつつ、部屋に戻った。

「……まだ目覚めないか」

祐也はリュックに入っていた黒い懐中電灯を取り出した。

形状からして懐中電灯というよりハンディライトと称するのが適当な代物で、点けてみると強力なＬＥＤの光が室内の薄闇を切り裂いた。その光をベッドに横たわる少女に向けて見つめながら、頭を働かせていく。

あの銃声でも未だ、誰もこの階に上がってこないし、やはり人気もない。誰かを探しに行くか、この少女が目覚めるのを待つか、あるいは……。

（無理矢理起こしてみるか）

停電してから――殺してから、既に一五分ほどが経ち、現在は一六時前だ。

祐也は机に置いてあったペットボトルを手に取り、中身の天然水を少女の端正な顔に掛けた。

「……っ、うぷっ……かはっ、ごほっ」

鼻腔や口腔から気管に水が入ったのか、少女は咳き込みながら目蓋を開け、上体を起こした。ベッドが少々濡れてしまったが、許容範囲内だ。

「おい、あんた」

「だ、誰ですかっ、ここはどこですか⁉」

少女は如何にも怯え惑ったような上擦った声を上げて、両手を動かす。が、手錠による拘束を自覚したのだろう。僅かに眉をひそめてから、彼女は何かを探るような素振りで両手を中空に彷徨わせ始めた。

「何やってんだお前、落ち着け、こっち見ろ」

「若菜ちゃんっ、どこ⁉　いるなら返事してっ！」

「新崎はいない。ここにいるのは俺とお前だけだ」

「……あ、あなたは、誰……ですか……？」

ようやく祐也に顔を向け、恐る恐るといった口調で訊ねてくる。ベッドの上に座っている少女は強張った全身を微かに震わせていた。

「俺は篠宮祐也、お前は？」

「……もしかして、若菜ちゃんの、お隣さんですか……？」

「そうだ。お前の名前は？」

そう対応しながらも、祐也は思い出していた。

引き籠もることにした初日、久々に新崎と言葉を交わした際、隣にいた少女だ。吹けば飛ぶような儚い雰囲気を持つ、大和撫子のような外見が印象に残っている。

「わ、私は……本条、唯……です。あ、あのっ、ここはどこですか⁉　若菜ちゃんはっ⁉」

「ここは俺の部屋で、新崎は何者かに攫われた。とりあえず落ち着け、ほら水でも飲むといい」

「攫われた……ぇ、あ……どうしよう……なんで、こんなことに……」

「いいから飲め、そして一息吐け」

祐也は呆然と呟く少女の手にペットボトルを握らせた。

すると本条はびくっと身を竦ませ、逡巡する素振りを見せたが、震える手で飲み始める。
そっと息を吐きながら彼女が目蓋を下ろしたのを確認し、祐也は再び口を開いた。
「よし、落ち着いたな。今から俺のする質問に答えろ、いいな？」
「は、はい……でもあの、若菜ちゃんが……っ！」
「待て、焦るな、俺はお前を助けてやった命の恩人だぞ？まずは俺から色々訊かせろ、いいな？」
「……はい」
小さく頷く少女を確認して一息吐きながら、祐也は座り慣れた椅子に腰掛けた。命の恩人云々は誇張の上に結果論だし、焦っているのはこちらも同様だ。
故に、冷静さを忘れてはならない。
「まず一つ目、お前らを攫おうとしていた奴らは何者だ？」
「わ、分かりません……若菜ちゃんのお家に上がって、忘れ物……探していたら、いきなり来て……あの、篠宮さんは、どうしてここに……？」
「今質問しているのは俺で、お前は後だ。二つ目、お前はどこの誰で、新崎とはどういう関係だ？」
「若菜ちゃんとは……従姉妹で、私は東京の方に住んでて、夏休みだから……遊びに来たんですけど……こんな、世界が、おかしくなっちゃって……」
手錠をされた両手でペットボトルを握り締め、華奢な身体を縮こまらせている。不安の表れか、未だに両目は閉じたままだ。
「世界がおかしくなった……？　どういう意味だ」
「どう、って……大人が、みんな塩になった……んですよね？」
「は？　塩？」
あまりに想定外かつ意味不明な言葉に、思わず間の抜けた声を上げてしまった。そんな祐也に何を思ったのか、本条は如何にもびくびくと怯えた様子で小さく呟き出す。
「え、えっと、塩だって言ったのは、学校の人たちが調べたから、らしいんですけど……とにかく、大人の人たちが、みんな白い粉になって、いなくなってしまった……んですよね……？」
「いや……ですよねって、俺が知るかよ。知らねえから訊いてんだよ」
「す、すみません……でも、みんなそう言ってますし……」
「みんなって、お前が実際に見たわけじゃないんだな？」
本条は躊躇いがちに頷き、そのまま顔を俯けた。先ほどから目蓋を開けず、対面の祐也を見ようとしない。
「なんだそりゃ……いいか、俺は真剣に訊いてるんだ。塩

だの白い粉だのふざけるな、真面目に答えろ」
「あの……私、目が見えないんです」
「……は？」
「だから、あの……すみません……」
申し訳なさそうにか細い声で言い、俯けていた顔を更に下げて、謝罪してくる。
祐也は思わず唖然としてしまったが、すぐに動き出した。
「おい、顔を上げて、目を開けろ」
「……は、はい」
薄暗い部屋の中、祐也はベッドの前で片膝を突き、ハンディライトの光を少女の右目に直射した。長い睫毛に縁取られた双眸は閉じたりせず、本条は平然としている。
強力な明かりに祐也の方が目を細めながら、黒い瞳を凝視してみた。
「これは……瞳孔開きっぱなしだな」
「……」
「お前、全く見えないのか？　光すら感じないのか？」
「……はい」
全盲であることを肯定する少女に悲壮感は見られない。ただ祐也という他人を警戒しているような、小動物めいた臆病さしか感じられない。
「なるほど、そうか……分かった。悪かったな、知らずとはいえ理不尽なことを言った。つまりさっきの塩だのなんだのは冗談でも何でもないんだな？」
「はい……あの、篠宮さんは、知らないんですか……？」
「知ってれば訊かん……こいつもらうぞ」
「あ……」
祐也は少女の手からペットボトルを抜き取り、椅子に座り直した。そして生温い水を一気に飲み干し、大きく息を吐き出す。
「大人がいなくなった、だったか……なるほど、だからか……お前は新崎のことが心配だろうが、世界がおかしくなったって話、聞かせろ」
「いいですけど……あの、それを話したら、私も色々訊かせてもらって、いいですか……？」
天井へ向けて照射されるハンディライトの余光で、本条の顔には陰影が色濃く差し、暗澹とした面差しを作り上げている。
「ああ、だから話せ、いったい何がどうなってやがる」
だが祐也は構わず、構う余裕がなく、話を急かした。
「……分かりました」
そうして本条唯という盲目の少女から、世界の異常について聞かされた。

第三話　前途多難／「頭の良い人です」

事の始まりは八月一日だという。

曰く、〇時ちょうどの真夜中に、大人たちの身体が白い粉になって崩壊した。どうやら二〇歳以上の成人は例外なく塩に変質し、いなくなってしまったらしい。ネットの情報によれば、世界中でその現象が確認されており、この二週間の間に成人を迎えた者も塩になって死んだそうだ。

異変が起こって間もなく、真夜中のうちに本条は新崎と共に祐也の通っている南高校（みなみ）――通称・南高（みなみこう）に向かい、新崎の友人やクラスメイトたちと合流した。高校には生徒たちが次々と集まって来て、昼頃に体育館で集会を開き、話し合った。

結果、その日の夕方には生徒会主導で近隣のコンビニやスーパーなどの商店から飲食物の回収作業を開始した。生徒たちは自宅から生活用品を持ち込んで学校に寝泊まりするようになり、飲食物を含む各種資源を収集しながら、未だ姿を見せない生徒の招集なども行っていったそうだ。

「だいたい……こんな感じです」

「月末過ぎたら終末が始まっちまったと……笑えねえ話だ」

ベッドの縁に腰掛ける本条の表情は硬い。

祐也はポケットに入れっぱなしだった拳銃を思い出して、取り出した。俗にリボルバーと呼ばれる回転式拳銃は銃把（グリップ）こそ茶色い樹脂性で安っぽく見える。回転式弾倉（シリンダー）やそれを支えるフレームなどは黒い金属製で重厚感があるとはいえ、銃身がかなり短いので一見するとチャチな玩具にしか見えない。

だが、これは紛れもなく非日常の代表格ともいうべき凶器であり、その威力は体感済みだ。こんな代物を一介の高校生が手にできている現状こそが、本条の話に信憑性を与えている。

「あの……訊いても、いいですか？」

「……待て、ちょっと待て……お前ここに何しに来た？」

大人たちが消え、未成年者も成人すると塩になるらしい世界。その摩訶不思議についての疑問より、祐也はこの非日常的な終末世界の日常について、頭が回っていた。

拳銃のグリップがやけに冷たく感じる。

「さっきお前、忘れ物とか何とか言ってたよな」

「は、はい。大事なオルゴールを、若菜ちゃんのお家（うち）に忘れていて……落ち着いたら、ないことに気付いて……すごく大切なものなので、取りに来たんです」

「何人でだ？」

「四人、ですけど……？」
それがどうかしたのか、とでも言いたげな怪訝さを覗かせる本条。
「新崎、石川、お前、あともう一人も南高の生徒か？」
「はい。この状況で、女の子二人だけで出歩くのは危ないからって、若菜ちゃんのクラスメイトの男子が、付いてきてくれたんです」
見るからに人畜無害そうな少女の暢気さに反し、祐也は最悪の可能性を悟り、一気に焦燥感が湧き上がってきた。
「さっき、なぜ襲われたか、分かるか？」
「いいぇ……篠宮さんはどうしてここにいるんですか？　若菜ちゃん、あの日……すぐに篠宮さん家のインターホンを鳴らして、その後も電話したり、何度か呼びに来たりしたそうなんですけど……これまで、どこにいたんですか？」
溜め込んでいた不安の発露なのか、少女は問いに問いを重ねてくる。その表情や声音には疑念が込められているようにも感じて、祐也は思わず嗤った。
「お前、俺が連中の仲間だとか疑ってんのか？」
「い、いぇ……そんなことは……」
「俺を疑える頭があるなら、同行してきた奴を疑え。もう一人の奴の名前は？」
「杉田……直人さん、ですけど、それが何か……？」
なぜ未だに気付かないのか、祐也は本条の能天気さに呆れ返る。盲目という障害と整った容姿故に、人から親切にされて育ってきたのだろうか。あるいは同じコミュニティに身を置いている少年なら悪人ではないと思い込んでいるのか。いずれにせよ、頭の回転が悪い事は確かだ。
「これは推測だが、十中八九お前と新崎は杉田に売られた」
「う、売られた……？」
「話を聞く限り、街の未成年者たちは学校か学区単位でかで纏まって動いてるんだろ？　だが、不良共や学校にすら通ってなかった連中……そういう馬鹿共はこの状況でどうすると思う？」
「……え、ぁ……え？」
少女の顔が僅かに引き攣り、戸惑った声が漏れ出る。
理解したのかしていないのか不明だったので、確認の意味も込めて祐也は言ってやった。
「一〇代の男なんざ性欲の塊だ。この状況に便乗して好き勝手やる連中は必ずいる。だからお前と新崎の護衛として男が二人同行した……が、そのうちの一人がどっかの不良共とグルだったら、どうなる？」
「それ、は……もしかして……」
「学校は秩序が保たれてるんだろ？　だから好き勝手はで

きない。杉田はお仲間の不良共にお前と新崎を売って、一緒にお前らをレイプしようとしたんだろうな。でなけりゃ、なんでこんなマンションの八階で襲われるんだ？」

高校からマンションまでの道中でも襲えただろうが、広所では逃げられる恐れがある。だが、ここは全く人気のない八階であり、一度家に入らせれば袋の鼠だ。あの大男や肥満体、金髪たちは杉田の連絡で九階にでも待ち伏せて、玄関前で待っていた石川を殺し、新崎と本条という獲物を狩ろうとしていたのだろう。

（だがこいつらは連れて行かれようとしていた……？）

南高はそれなりに偏差値が高く、校則が厳しかった。男子生徒は頭髪の長さまで制限されていたほどなので、当然の如く不良らしい不良はおらず、実に平和な学校だった。

祐也が高速で思索を巡らせていると、少女が焦燥感も露わに口を開いた。

「あ、あのっ、石川さんは⁉　石川さんはどこですか⁉」

「奴なら殺されてたぞ、新崎の家の玄関前でな」

「――――」

唖然とする本条を無視して、祐也は思考を進めていく。

強姦するつもりなら、人気のないマンションの八階という立地は最適だろう。にもかかわらず、あのときの新崎も今日の前にいる本条も、着衣は乱れていなかった。つまり連中は全く手を出すことなく、すぐに連れ出そうとしたのだ。長居すれば新崎を心配した高校の連中が様子を見に来るだろうから迅速に撤退したのだろうが、それにしたって行動が理に適いすぎている。

（拳銃に無線機……相手も馬鹿じゃない……不良共なら群れてるだろうし、アジトかどこかに連れ帰って仲間たちと……仲間がいるなら……）

むくむくと膨れ上がる危機感に対し、祐也は冷静を心掛けて、軽く深呼吸した。

「……あ、あのっ、若菜ちゃんは……？」

「まず間違いなく、連中の本拠地でレイプされるだろうな」

微かに震えている本条に構わず率直に告げた。

おそらく新崎は監禁されて、もう二度と解放されないかもしれない。彼女は誰の目から見ても並以上に可愛い美少女だ。もし逃げた金髪と杉田に仲間がいれば輪姦されるだろうが、現状で最重要な問題は別にある。

「すぐに帰って、みんなに報せて、助けないとっ！」

「そうするのは勝手だがな、お前少しは考えたらどうだ？」

「何をですかっ、早く……早く若菜ちゃんを助けないと酷いことになるんですよ⁉」

本条は盲目とは思えない動きで立ち上がり、力強く訴えている。だが、祐也は尚も椅子に腰掛けたまま、冷徹とさ

え称せる冷めた眼差しで彼女を見上げていた。
「俺は二人殺してお前を助けたが、逃げた残り二人に顔を覚えられた。もちろんお前の顔もな」
「え、殺し……って……」
「そして学校には杉田以外に不良共とグルの奴がいないとは限らないし、そもそもお前、一人でここから南高まで辿り着けるのか？」
「あ……その、篠宮さんも、学校に行きますよね……？」
気弱そうな少女から向けられる表情や声音が変化した。祐也に対して明らかな恐怖や疑念を抱いていながらも、縋るような謙るような素振りが見られる。
普通の男子高生ならば、盲目の美少女への劣情やら庇護欲やらを掻き立てられて、脅迫や色良い返事をする場面だろう。だが現状は尋常の範疇になく、祐也は自身が捻くれていることを自覚している。
「行くわけねえだろ、アホか」
「で、でも……」
「もし逃げた二人が結構な規模の集団の一員だった場合、連中の仲間を二人殺した俺は確実に復讐される。不良共の本体か、あるいはグルの内通者がいるかもしれない場所になんて行けるかよ。しかも、もう杉田たちが逃げて三〇分以上経った。いつここに連中の仲間が駆け付けて来てもおかしくない」
「え……？」
本条は怯えを孕んだ声を漏らし、所在なさげに立ち尽くしている。祐也も立ち上がり、まずは服を脱ぎ始めた。
どうするか方針は決まったので、もうこれ以上の時間は無駄にできない。
「ここから南高まで走って五分、自転車なら三分だ。杉田が被害者面して南高に逃げ帰り、俺が石川を殺して新崎とお前を攫った……とか何とか訴える可能性は低いし、お前の証言と二人分の死体があれば、俺がお前を暴漢から守ったヒーローだと証明されはするだろう」
「そ、そうですよっ、篠宮さんは私を助けてくれた――」
「だが俺はこの二週間、学校に一度も姿を見せなかった。家でひたすらゲームしてて異常に気付かなかったなんて間抜けな話、普通は説明しても誰も信じねえよ」
ジーンズと靴下を穿き、シャツを着ると、なるべく裾の長い半袖の上着も羽織る。他の服や必要な物は学校のスクールバッグに適当に詰め込んでいき、鍵類はポケットに突っ込む。
「俺はろくに友達もいねえし、クラスでもボッチだったからな。俺こそがどっかの不良と繋がりのある奴で、二人の死体は敵対している不良連中と新崎を奪い合った結果のも

のだとでも誰かに言われれば、説得力のある反論はできん」

それに何より、祐也は一人を銃で殺した。

銃の所持を知られるわけにはいかないし、だからといって現状で最強の武器を手放すなどあり得ない。もはやこの世界に法はなく、力こそが正義となっているはずなのだ。学校に身を寄せれば、秩序維持を果たしているらしい生徒会に銃を没収される可能性は高い。

既に杉田が学校に逃げ帰っていれば、時間的に誰かがこの場に駆け付けて来ているはずだが、未だに誰の姿も見せていない。それでも敵の今後の行動と状況が依然として不透明である以上、銃を失うリスクを冒したくはなかった。

「そんな、ことは……」

「あるんだよ、普段からの印象ってのは大きい。どれだけ理屈が通っていても、俺はまず信用されない」

念のため制服と生徒手帳も突っ込んだところで不意に思い出し、クローゼットから防災ラジオを取り出した。中学生の頃、技術の時間に半田付け作業から制作させられた代物で、非常用手動発電機能が備わっている。ハンドルを回すとキャパシタに電力が貯まり、ＬＥＤライトとサイレン、ラジオが電池なしで使用できるだけなく、ＵＳＢ端子のある機器と単三の充電池を充電できる機能まで備わっている。

祐也はテレビのリモコンや目覚まし時計などから計六本の単三充電池を抜き取り、スマートフォンの充電用ＵＳＢケーブルも引っこ抜いて、鞄に入れた。

「で、お前はどうするんだ？」

「え、ど、どうって……わたし……」

「意地の悪い訊き方だったか、言い直す。お前は俺にどうして欲しい？」

手錠を嵌めたまま、頼りなさげに立ち尽くしてる盲目の少女。

祐也に赤の他人である本条唯を助けてやる義理などないし、彼女は間違いなく役立たずの足手纏いだ。学校という集団に身を寄せられず、端から寄せる気もない祐也にとって、本条引いては新崎を助けるメリットはないだろう。

『え……ちょっと、篠宮、助けて篠宮っ！　祐也ぁ！』

しかし、一つだけ悔いていることがあった。殺人の衝撃に呆けて、見逃してしまったことだ。

新崎のためだけでなく、自己保身のためにも金髪と杉田を追い掛けて、二人を始末するのが最善だった。にもかかわらず、あのときは突然の状況に混乱して今ほど頭が回っていなかったし、割り切れてもいなかった。

「あの、えっと……若菜ちゃんを、助けてくださいっ、お願いします！」

「……一応訊く。なぜ俺にそれを頼む？」

「学校には内通者がいて、みんなで若菜ちゃんを探そうとすれば、情報が筒抜けになる……と思います。だから、その……私も一緒に連れて行ってください！　お願いします何でもしますからっ！」

深く腰を折る少女の後頭部を静かに見下ろすと、祐也は華奢な肩を乱暴に掴んで顔を上げさせた。と同時に大きく踏み込んで、本条の右頬に手を添えながら左耳に顔を寄せて、低く囁いてやる。

「何でもって意味、分かってて言ってるのか？」

「……っ、分かって、います」

「俺がお前を抱かせろって言えば、素直に従うのか？」

「わ、私の……私のせいで、若菜ちゃん、捕まって……それに、石川さんも、殺されてしまったんですよね……？だから、私……何もできないし、それで若菜ちゃんを、助けてもらえるなら……っ！」

黒い瞳に光はないが、双眸は強く引き締まり、意志の強さを感じさせる。

祐也にとって本条など有象無象の一人であり、義姉妹や新崎より優先順位は遥かに下だ。もし腑抜けたことを言っていたら、より詳細な情報を引き出してから見捨てて単独行動する気だったが、どうやら最低限の覚悟はあるらしい。

しかし念のため、もう一点だけ確認しておく。

「お前が同行してきても邪魔なんだが？」

「それは、重々承知している……つもりです。でも、戻ったら、私また、狙われる……かもしれませんし……」

どうやら一応、冷静に考えられる頭は持っているらしい。とはいえ、先ほど色々教えてやらなければ危険性に気付きもしなかっただろうが。

祐也は本条から身体を離すと、溜息を吐きながら床に置いていたリュックを漁った。

「……あ、あの？」

「ま、ぎりぎり合格か」

「え……？」

呆けて間抜け面を晒す少女を無視して、リュックの中をハンディライトで照らしながら目的の物を探していく。

（クソ、どこだ……車のキーと一緒には付いてなかったし、あいつは持ってなかったのか？　いや、帽子野郎があの四人の中では一番偉かったはず……あった）

リュックの内ポケットからビニールの小袋を取り出した。チャック付きのそれには黒い鍵が二つ入っている。祐也はうち一つを摘まみ出して、本条の手錠を掴んだ。小さな鍵は鍵穴にぴったり入り、手早く左右の輪っかを外していく。

「あ……ありがとう、ございます」

「お前は荷物持ちだ。足手纏いは女扱いしないからな」

「え、あ……は、はい！　よろしくお願いしますっ！」
本条は不安げな面持ちから一転して、口元をほころばせた。ほんの僅かな笑みとはいえ、花が咲いたような可憐さを感じる。
「とりあえずお前はこれを持って玄関前で待機だ。俺はまだ必要な物を回収するから、人の声とか不審な物音がしたらすぐに呼べ」
「分かりました。あの、私、耳はいいので任せてください」
「そうかい……ほらよ、水とティッシュやるから鼻血の痕でも拭いて待ってろ」
「えっ、鼻血⁉」
肥満少年のショルダーバッグと祐也のスクールバッグを両肩に提げた本条に、新品の五〇〇ミリリットルの天然水とティッシュ数枚を手渡し、玄関前まで誘導する。
当の少女はこの窮状にあっても一丁前に恥ずかしがっているようで、暢気なのか肝が据わっているのか甚だ疑問だった。

第四話　潜伏盗聴／「恐ろしい人たちでした」

祐也は大男から奪ったリュックを背負うと、まずは靴を履いて新崎家にひとっ走りし、玄関から女物の靴を回収する。それらしき靴は二足あったので、両方とも本条の足下に差し出した。おそらく片方は新崎のものだろう。

「靴だ、二セットあるから自分のを履け」

「あ、ありがとうございます」

本条の言葉に「ああ」とだけで返して、祐也は土足のまま忙しなく自宅に上がり込む。

これでいつでも逃走する準備はできたので、あとは必需品の回収だ。迅速に済ませる必要がある……のだが、祐也はある一室の前で立ち止まってしまった。

（クソ野郎の部屋……まあいい、有効活用してやる）

思い切って扉を開け、中に入る。祐也の自室同様に窓のない部屋なので真っ暗だが、ハンディライトで照らし出すと、宙に舞う無数の埃が微細な光を反射した。

この部屋に入るのは二度目だ。一度目は引っ越してきて間もない頃、まだ義父が尊敬に値する弁護士だと信じていた頃だ。

（相変らず自分の部屋は整理整頓されて綺麗なこったな）

リビングでは平然と床に料理をぶちまけ、物を投げるような男だったが、自分のことに関しては神経質なまでに几帳面だった。奴の死後、部屋は二年間ずっと放置され続け、誰も片付けようとはしなかった。

「……あった」

クローゼットを開けると、義父だった男の趣味用品が姿を見せた。

クロスボウだ。

内に秘めた暴力性の発露だったのだろう。奴は毎月、最低でも一回は必ず狩りに出掛けていた。弓矢での狩猟は法律で禁止されており、奴は弁護士だったが、気にしている様子は全くなかった。車で何時間も掛けて山間部に繰り出し、法規制されていない武器で違法行為を繰り返して、野生動物を殺傷していた。鹿を射殺した日などは散々自慢話を繰り広げてご機嫌だったので、祐也も母も義姉妹も安堵していたものだが、成果のない日は最悪だった。

（あの野郎、絶対誰にも触らせなかったくせに、散々見せびらかして自慢してきたからな……それが今になって活きるとか……）

クロスボウは二つある。

一つは丁字型の黒いソフトケースに収まっており、大きさは全長一メートル、幅八〇センチほどだ。祐也の記憶が

確かならば、フルサイズリカーブと呼ばれるタイプの、形状もメンテナンス作業も単純なものだ。

もう一方は迷彩柄の箱型ハードケースに収まっており、ケースの大きさは全長一メートル、幅と高さは四〇センチほどだ。こちらはフルサイズコンパウンドと呼ばれるタイプの、形状もメンテナンス作業も複雑なものだ。

運搬は前者の方が断然楽そうで、試しにどちらも手に取って持ってみた。

「重た……」

ソフトケースの方は五キロもない程度だが、ハードケースの方は優に一〇キロを越えているだろう。ハードケースは素材からして丈夫なので、その重さが半分ほどを占めているはずだ。

（両方はさすがに持って行けないか）

他にも持って行きたい物はあるし、既に拳銃とナイフと警棒とスタンガンがある。荷物持ち要員がいるとはいえ、非力な盲目少女に活躍は期待できない。

（確かコンパウンドの方が高精度って話だったか？）

道具は単純な方が使いやすいが、クロスボウは拳銃の代用品にする予定だ。

素人の祐也にとって、拳銃は五メートル一〇メートル先に当てるのも難しいだろうし、発砲音はうるさく、弾薬も限られているので無闇に練習もできない。その点、クロスボウは矢を回収すれば使い回せるので練習も可能だし、発射音も静かで、遠隔武器として非常に有用だ。欠点といえば連射性と携帯性に欠けることか。

「こっちは隠せそうにないからな……」

祐也はソフトケースを持つと一旦部屋を出て、自室のベッド下に押し込んだ。が、ふと思い直し、再度ソフトケースを持って義姉妹の部屋に向かうと、そこの二段ベッド下に隠した。

篠宮家前の惨状から、様子を見に来るだろう南高の連中はドアを破ってでも家内を調べるだろうし、杉田と金髪に仲間がいればそちらも同様のはずだ。彼らからして犯人となる祐也の部屋は隅々まで調べられる可能性が高いだろう。

（こいつも持って行くか）

小走りで義父の部屋に戻ると、クローゼットから大型のリュックを取り出した。

狩猟に出掛ける際、奴がいつも持って行っていたものだ。あの男は次回の準備を狩りから帰ってきた翌日にしていたので、中身は準備万端状態だろう。

中身を確かめている時間が惜しいので、背負っていた中型リュックを下ろして、大型のものを背負い直した。チェストベルトとウエストベルトを締めて身体に固定し、右手

にクロスボウのハードケース、左手に中型リュックを持つ。
（……これ全部で確実に二〇キロ以上はあるな）
運動不足の身には辛いが、祐也の体格は中の上といったところだ。一応、二年前までは人並み以上に身体を鍛えてもいた。持ち運べないこともない量だった。
「篠宮さんっ、篠宮さん！」
ふと玄関先から声がしたので、廊下に顔を出した。開きっぱなしの玄関扉の向こうには死体の側に少女が立ち、こちらに顔を向けている。
「どうした」
「車の音が聞こえました。たぶんそこそこ大きな車で、このマンションの駐車場か近くに停めたと思います」
「なに」
祐也は急いで共用廊下に飛び出し、手摺壁から慎重に地上を覗き込んでみた。すると本条の言う通り、マンションの駐車場に白いワゴン車が停まっていて、今まさに人影が降りてきている。目視できる限り人数は八人で、うち三人は金髪の目立つ頭が確認できる。
不意に誰かが顔を上に向けたのが見え、祐也は瞬時に頭を引っ込めた。
（クソが……やっぱ集団かよ）
大男から奪い取り、左腕に巻いた黒い腕時計に目を向ける。如何にも高級そうなアナログタイプのそれは一六時二三分を指していた。杉田と金髪に逃げられて、およそ四〇分といったところだろうか。八月中旬の今は日没が一八時過ぎなので、まだまだ外は明るい。
「あ、あの、何か怒っているような声が、聞こえるんですけど……」
「そうだな」
不安を隠そうともしない本条の呟きに適当な相槌を打ちながら、祐也は自身が作り上げた二人の死体から素早く物資を回収していく。先ほど取り忘れていた、ベルトに付いている拳銃のホルスターなどだ。他にも無線用とスタンガン用と警棒用、それに手錠用と思しきものまで全て取り外し、ひとまず中型リュックに纏めて突っ込む。
「篠宮さん、階段を上ってきてます……っ！」
「一応訊いておくが、どっちの階段だ」
「左です、あっちですっ」
本条の細い手が指差すのを横目に、祐也は自宅のドアを閉めて、念のため施錠しておく。
すると次第に、祐也にも話し声が聞こえてきた。
「右の方から音はしないな？」
「はい」
「よし、じゃあ行くぞ。リュックを掴め、先導してやる。

それと頭は低くしろ……もっとだ、このくらいだ」
「ひゃっ⁉」
背中に背負った大型リュックに本条の手を添えさせ、頭を押さえて共用廊下の手摺壁からはみ出さないよう中腰にさせた。
このマンションは一二階建てで、共用廊下のある正面は北に面している。外部階段は両端近くにあり、西側の階段の方が一階エントランスからは近く、エレベーターの横に併設されている都合上、普通は皆そちらを利用する。
（クソ、遅い……）
中腰姿勢とはいえ、祐也ならば大荷物だろうと素早く移動できるが、本条がいるのでゆっくり急げの精神で東側の外部階段を目指す。
「階段を上がるぞ、気を付けろ」
「えっ、下りるのでは……？」
「いいから、今は俺の言う通りにしろ」
相変らずの姿勢で手摺壁に姿を隠しながら、階段を上がっていく。後ろを付いてくる本条を気遣って想定以上に遅れたが、なんとか一〇階の共用廊下に出た。
ちょうどそこで、階下から声が響いてくる。
「おいおいおいっ、マジかよ⁉」
「間島さんとカズ……これもう完全に死んでんぞ……」
「おい優大ッ、テメェ二人がこんなんされて逃げ帰ってきたのかよ⁉」
「ちょっ、落ち着いてよ隼斗、だって相手間島さんの銃持ってたんだよ？」
祐也は外部階段から共用廊下を西に一〇歩ほど進んだところで立ち止まった。
「あの、篠宮さん、に、逃げないと……っ！」
「落ち着け、上には来ないはずだ」
怯懦に塗れた囁き声と共にリュックを引っ張ってくる少女に、祐也も小声を返した。
もうアレから四〇分以上が経っているのだ。二人も殺した人間が未だ現場に留まっているとは思うまい。
「あの、間島さんが……こんな……チックショウふざけやがって！」
「あー、荷物とか全部なくなっちゃってるね、やっぱり」
「うっ……うぅ、間島さん……カズ……」
「おい直人っ、殺ったのテメェのクラスの奴なんだろ⁉」
「う、うん……下の名前は忘れたけど、篠宮っていう奴で……」
怒りや悲しみの声に紛れて、どこか怯えたような気弱さを感じさせる声が聞こえてきた。直人と呼ばれていたので、あのとき逃げられた二人の片割れ——杉田だろう。

（まさか件の杉田が同じクラスの奴だったとは……）

祐也は意外感を覚えずにはいられなかった。しかし言われてみれば、確かにあんな奴がいたような気もする。

「なんでそんな奴がここにいんだよ!?　やっぱテメェ裏切りやがったのかっ!?」

「だ、だから違うって！　そんなことしてないって！　そもそも篠宮は学校にいなかったしっ！」

「おいこれ見ろよ！　篠宮って書いてあんぞっ！」

「ここに間島さんとカズの仇がいんのか!?　おいこらクソ野郎出てこいやっ！」

怒声と共に激しい物音が響いてくる。おそらく鉄パイプに類する鈍器でドアを殴り付けているのだろう。連中の遣り取りを聞いている限り、やはり荒っぽい不良共のようだ。

「お前ら四人で、啓太と和輝の遺体を車に積め。連れ帰ってちゃんと弔ってやる」

「はい久瀬さんっ！」

「隼斗と京平は俺とこの部屋の中を調べるぞ。中にいる可能性はゼロじゃないし、顔写真を探す」

「分かりました！」

久瀬と呼ばれる落ち着いた声の主が指示すると、他の連中は打てば響くような返事をしている。静かな怒気に濱った口調からは成熟した精神性が窺えたことからしても、この場で最も偉いことは間違いない。八人しか来ていないようだが、あるいは久瀬なる人物は規模不明集団のリーダー格なのだろう。

「直人、その篠宮とかいうクソ野郎がどんな奴か話せ。なるべく詳しくだ」

「は、はい……えっと、篠宮は……いつも一人でいるような奴で、たぶん友達もいません。成績は……悪くないと、お、思いますけど、期末テストの成績上位者に、名前はなかった……と、思います……」

「運動神経はどうだ？　女はいたか？　兄弟は？」

「体育の授業では……普通よりできてた、と思います。で、でも、四月にやった体力テストの短距離走は、陸上部の奴より速くて……でも帰宅部でした。彼女はいない……はずです、兄弟は分かりません……新崎とは家が隣同士ですし、篠宮のことは新崎が色々知っていると思います……」

おどおどしながら答えている姿が想像できる語り口だった。会話を盗み聞いている間も、玄関扉を破壊しようとしている物音が大きく響いている。

「隼斗、京平、お前等の頭には脳みそ詰まってないのか？」

「え、急になんですか久瀬さん」

「……攫った女の家からベランダ経由で鍵開けてこい。あっちもドアこそ閉まってるが、鍵は掛かってないはずだ」

「あっ、そっか！　さすが久瀬さん頭いいッスね！」
祐也としても、本来ならばベランダ経由で新崎家の鍵は掛けておきたかったが、時間が許してくれなかった。
本条によれば例の異変は真夜中に起きたので、新崎家と反対側の八〇二号室どころかマンションのほとんどの扉は施錠されているはずだ。連中もベランダ経由で侵入する知恵がある程度には馬鹿ではないらしい。
「話が逸れたな。直人、お前は学校に戻れ」
「え……でも、もう篠宮か本条が行って、みんなに報せてるんじゃ……？」
「この二週間、クソ野郎は学校に来ることなく、この異変前から孤立していたんだろ？　だったら周囲に対する奴の信用度は低いはずだ。もし奴がお前のことを言いふらしていたとしても、ずっと学校にいたお前の発言の方がまだ信憑性がある」
「で、でも、本条の方は？」
聞こえてくる声に、祐也は思わず少女に目を向けた。長い黒髪のか弱げな彼女は自身の名が出てきたからか、恐ろしげに目を閉じたまま身を竦ませていた。
「そいつは二人が殺られる前に気絶させたんだろ？　だったら問題はない。そもそも盲目の女の言葉なんざ信憑性に欠ける。十中八九、その本条はクソ野郎と一緒にいるか、学校に避難しているだろうが……どうであろうと、お前は篠宮こそが犯人だと主張しろ。疑われはするだろうが、クソ野郎や女ほどではないはずだ」
「そ、そうかも、しれないですけど……なんで、また学校に？　今回のことが終わったら、おれはもう学校に戻る必要はないって……」
「状況が変わっただろ、今は篠宮を見付けることが最重要だ。クソ野郎は今回のことで身の危険を感じたはずだ。既に学校に逃げ込んでいるか、今後逃げ込む可能性はある」
芯の通った力強く低い声が、泰然とした口調で言い聞かせている。声からだけでも有無を言わさぬ迫力が感じられた。
祐也は相手のリーダー格が思った以上に厄介な者であることを悟り、思わず舌打ちしそうになる。脳筋の馬鹿ならどれだけ良かったことか……。
「久瀬さんっ、開けました！」
「よし、お前等は中を漁ってクソ野郎の写真を探せ。最低でも中学の卒アルくらいは見付けろ」
「うっす！」
「直人、お前は学校に戻れ。それと今後は一日に三回、お前の方から無線して状況を報告しろ。毎日朝の五時から六時、一二時から一三時、一八時から一九時の間の三回、チ

ヤンネルはそのままだ。分かっていると思うが、くれぐれも学校の連中にゲロったりするなよ。そうすれば連中はお前を吊し上げて私刑（リンチ）にするぞ」

「は、はい……分かりました」

祐也は思考をフル回転させていた。

今後どう動くのか。如何にして連中を殲滅（せんめつ）し、ついでに新崎を救出するのか。その糸口程度は既に見出せている。

「じゃあ行け、一時間以上戻ってこないとなると、学校の連中が様子を見に来かねない。俺たちと一緒にいるところを見られれば終わりだぞ。連中と一緒に様子を見に来ることになった場合は高校から無線しろ、俺たちがまだここにいれば、おそらく届く。それと可能な限り、連中には自転車で来させるんだ」

「え、自転車……？」

「いいから、今は言う通りしろ。時間がない」

「……はい、あの……おれ、ちゃんとやりますから……だから……っ！」

「お前を見捨てたりはしないし、攫った女ともヤラせてやる。ほらさっさと行けっ、駆け足だ！　焦った風を装って戻れっ！」

「はっ、はい！」

叱咤する低い声に、男にしては高めの細い声が威勢良く応じた。共用廊下を疾駆する足音が微かに響き、消えていく。それから久瀬の声は鳴りを潜めてしまった。十中八九、篠宮家を捜索しているのだろう。

祐也はすぐ側の少女に改めて目を向け、口を開いた。

「本条、まだ声は聞こえるか？」

「い、一応、微かに……」

「なら重要だと思う会話は後で俺に教えろ」

やや緊張した面持ちながらも、少女は小さく頷いた。役立たずの足手纏いかと思えば、早々に役立っている。

祐也はこの半月、つい小一時間前まで睡眠時以外はほぼ常にヘッドホンを装着し、大音量でゲームをしていた。その当然の帰結として、半月前と比べて聴覚が狂っていることを自覚できるレベルで不調だ。以前までの人並みの聴力に戻る、あるいは現実の音に慣れるまで、まだ幾ばくかの時間を要するだろう。

「……」

「……」

沈黙だけが流れる中、階下の方から声が聞こえてきた。

腕時計を確認してみると、一六時三七分を指している。

「久瀬さーんっ、運び終わりましたー！」

「一人はこっち来て手伝え、二人は念のため女の家を探せ。一人はこれ持って、そこで地上の様子を見張ってろ」

「分っかりましたー！」
祐也は本条と共に息を潜めて一〇階の共用廊下で待ち続ける。とはいえ、出会って間もない少女を信用しきるほど暢気ではないつもりだ。念のため右手に拳銃を握り、廊下の左右を警戒しておく。
「……」
腕時計の分針が九に差し掛かったとき、祐也の耳に低く張りのある声が届いた。
「よし戻るぞ、そろそろ高校の連中がここの様子を見に来てもおかし――ん？」
「久瀬さん、なんか音鳴ってるッス。このトランシーバーぶっ壊れたんスか？」
「直人だな。喋れない状況にいるからマイク叩いて合図を送ってるんだろう。たぶん学校を出た合図だ」
「え？　でもこれって二〇〇メートルくらいしか届かないんじゃなかったんスか？」
「ここから南高まで直線距離で五、六〇〇メートル程度だろ。しかもここは八階で、高校までは遮るものもなく良く見える。見通しが良ければ一、二キロでも一応届く。覚えておけ」
「うぃっす！」
「急ぐぞ、車だろうとチャリだろうと三分で来るはずだ」
複数の慌ただしい足音が遠ざかっていく。
祐也はそれを聞いて無線機の有効範囲を脳内にメモりながら、瞑目している少女を見た。
「おい、あいつら家の中で何か言ってたか？」
「えっと……どうやら、たくさんの食料品とゴミが溜まっているのを見て、篠宮さんはここを住処にしていたはずだ……とか、言っていました。それで、そのうち戻ってくるかもしれないから、高校の人たちが様子を見に来た後、今晩あたりから……マンションに何人か寝泊まらせて、篠宮さんを待ち伏せるつもりみたいです……」
「……だいたい予想通りか」
「あ、あと、制服や学校の鞄、それに学生証が見付からなかったので、高校に行ったかも……とか、姉妹がいるはずだから、そいつらと一緒に行動しているはずだ……とかも、聞こえました」
やや自信なさげな様子で告げた後、本条は眉尻を下げて俯いた。
「あの、若菜ちゃんから聞いたんですけど、篠宮さんのご姉妹は、北海道に旅行へ行って……るんですよね？」
「そうだ」
「だったら、その……安心ですね」
「……お前の頭ん中は花畑なのか？」

「ふぇ⁉」

祐也は思わず舌打ちを零して、ボールさながらに少女の頭を二、三度軽く叩いた。

生憎と祐也の頭の中は花が咲けるほど穏やかでも空っぽでもない。

（どうせ新崎から漏れる……クソッ、最悪すぎる！）

義姉妹が旅行先からこの街に戻ってくる可能性は高い。そのくせ未だに戻ってきていないはずだ。

祐也自身、依然として半信半疑ではあるが、どういうわけか世界は成人すると塩になって死ぬという法則に支配されているらしい。死の刻限――二〇歳までのタイムリミットという絶大な不安感から目を逸らし、騙し騙し生きていくには何らかの目的が必要不可欠だろう。

家族仲が良好とは言い難かったが、祐也は死ぬまでに義姉妹と会って色々話しておきたいことがあるし、それは向こうも同様のはずだ。故に、二人はまず間違いなくこの街に戻ってくるが、それがいつになるのかは不明。北海道から本州中部まで、車ならば二週間でも余裕で帰ってこられるはずだが……。

充電切れのスマートフォンに彼女らからのメールが届いているはずなので、後で確認しておく必要がある。

そして、早々に連中を排除する必要も。

「あっ、車の音です、エンジンが掛かりました」

「今のは俺にも微かに聞こえた。お前はちょっとここで待ってろ」

祐也は一旦背中の荷を下ろし、共用廊下の東端に走り寄って、手摺壁から地上を覗き込んでみた。

（……なんだ、何してやがる？）

白いワゴン車はマンション前――マンション東側の南北に伸びる道路に出て、南に頭を向けたまま止まっている。尚もエンジンは掛かっているようだが、なぜ発進しないのか。このままでは南高の連中がやって来てしまうだろう。

「おい……野郎まさか……」

道路の北側から一〇人程度の自転車集団が現れたところで、祐也は思い至った。

両側で二車線の道路には路肩に突っ込んだ車が一、二台見られる程度で、中央線を跨ぐようにして止まっている車など例の白ワゴン以外になく、かなり目立っている。

自転車集団と白ワゴンの距離が二〇メートルを切ろうかというとき、後者が急発進した。白ワゴンを三台の自転車が尚も止まらず追い掛けていくが、土台スピードが段違いで、交差点の左向こうに消えていく。

（クソが……信憑性を演出しやがったな）

祐也からすれば相当にわざとらしいが、自転車集団こと

南高の連中からすれば、挑発的な動きに見えただろう。そして、あの白ワゴンに祐也とその仲間が新崎と本条を乗せて運転している……とでも杉田か誰かに言い出されれば、彼らにそれを否定できる材料などない。

「行くぞ、リュックを掴め。また階段を上がる」

本条のもとまで駆け足で戻り、急いで荷物を持つ。

「高校の人たちに見付からないでしょうか……？」

「大丈夫だ、屋上に行く」

何も知らない南高の連中は、念のためにと一階から一二階まで一通り調べる可能性が高い。

祐也はもう腰を屈めたりせず、盲目の少女と共になるべく急いで上階へと足を運んでいく。

「あ、あの……このマンションの屋上って、開放されてるんですか……？」

「施錠されてはいるが、鍵ならある」

祐也はポケットから樹脂性の鍵を取り出し、屋上に繋がる塔屋の扉を開けた。

「え、どうして……？」

「何でもいいだろ、ほら早く出ろ」

一年半ほど前、一階エントランスで『屋上』という管理タグの付いた鍵を拾ったことがある。そのまま返すにはもったいなく、しかし返さなければドアの鍵ごと変えられて無用の長物と化すかもしれない。ネットで見掛けた知識を試したかったこともあり、祐也はホームセンターで材料を買って自分で複製した後、管理会社に鍵を返した。当時は義父の件で一人になりたかったので、真夜中にこっそり屋上に上がって、一人夜空を見上げていたものだ。

「……半年振りくらいか」

独り言は地上約四〇メートルを吹き抜ける夏の風に攫われていった。

閑散とした屋上に落下防止柵などはなく、周辺を広く見回すことができる。最近はすっかりご無沙汰していたが、まさかこんな事態で再訪するとは夢にも思っていなかった。

「こっちだ、下手に動くと落ちるから注意しろ」

「は、はい……」

鍵を閉めてから、本条を連れて端まで歩いて行き、外縁部の段差前で腰を下ろす。位置的に、ちょうど篠宮家のある八〇三号室の上だ。

「下の声が聞こえるなら、どんな話してたか後で教えろ」

「分かりました」

ご丁寧に、本条は両手を耳に添えて首肯した。

聞く気満々で結構なことだと思いつつ、祐也はリュックを下ろして脱力する。心身共に半端なく疲れていた。

「……」

入道雲の浮かぶ夏空を見上げて、溜息を一つ。
一時間ほど前までは何事もなく日常を過ごしていると思っていた。いや、思ってすらいなかった、当たり前を享受していた。しかし、今や周囲より二週間遅れで意味不明な状況を実感して、挙句に厄介すぎる事態に陥っている。
「……最悪だ」
「……すみません」
目を閉じ、両手を耳に当てて集中している様子の少女から、心底申し訳なさそうな呟きが聞こえてきた。風に揺れる長い黒髪は綺麗だが、艶がない。
（本条唯、か）
盲目の少女にとって、この非日常では日常の頃より、一層の足手纏いであることは自覚しているはずだ。彼女も彼女で色々と辛いだろうが、しかし祐也は勘違いの謝罪を否定したりはしなかった。
「……」
それからは互いに無言のまま、高校の連中が帰っていくまで、二人は屋上で待ち続けていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売)／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

http://ktcom.jp/